



透明感が増した雨上がりの風景。その空気感を新クリスピアは見事に再現してくれた。草花の発色がなんともいえず心地よい。自然に目に飛び込んでくる上品な仕上がりが。 (イギリス・スコットランド・2008年)

“旅の記憶や撮影時の感動がプリントを見た瞬間、瞬時によみがえる”

A3 プラス対応
高画質顔料プリンター
**MAXART K3
PX-5600**



SPECS ●インク=8色顔料PX-P/K3インク ●出力解像度=5760×1440dpi ※●対応用紙サイズ=L判/KG/2L/ハガキ/ハイビジョンサイズ/六切/四切/A6縦~A3ノビ縦 ●インターフェース=USB2.0High Speed×3 ●対応OS=Windows Vista/XP/2000Professional, Mac OS X 10.3.9以降 ●大きさ・重さ=616×322×214mm・約12.2kg (本体のみ) ●価格=オープンブライズ
※最小1/5760インチのドット間隔でプリントします。

新たにバリューパックも登場し 充実のラインアップ!!

サイズはL判からA3ノビの12種類。六ツ切や四ツ切といった銀塩プリントでおなじみのサイズも用意されている。今回、ロゴマークなどパッケージデザインが新しくなったほか、L判の200枚、2L判の50枚、A4の50枚といったバリューパックがラインアップに加わった。



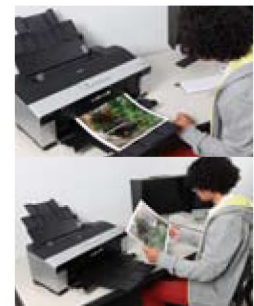
【エプソン マックスアートインフォメーションセンター】
電話 050-3155-8100 (KDDI光ダイヤレクト)
http://www.epson.jp

透明感が増していること。用紙の白色度が高まっていることも関係して、ハイライトが際立ち、抜けがよくなっている。シャドウの再現性もよく、色のにこりが少ない。新緑などの鮮やかな緑、黄緑が従来は不自然に見えることもあったが、新クリスピアではうまくなじんでいて目障りに感じるようなことはないようだ。私が写真でいちばん大切にしているのは「空気感」。このあたりはカメラやレンズ選びはもちろんだが、最終アウトプリントであるプリントで結果が得られなければ意味がない。その決め手となるのが用紙である。新クリスピアは従来よりも表現力が向上している印象で、撮影時に感じて切り取った空気感をうまく再現。スコットランドを旅しているときの記憶や撮影したときの感動がプリントを目にすると瞬時によみがえった。

従来品とのモノクロプリント比較



階調性がなめらかで、特に中間調からハイライトにかけての再現性がよくなっている。ハイライトの抜けもいい。黒の締まりも向上し、従来よりも表現力が豊かになっている印象だ。(イギリス・スコットランド・2008年)



ニコンD700で撮影した作品をPX-5600でA3サイズの写真用紙クリスピアに出力。



L判の200枚入り、2L判・A4サイズの50枚入りにバリューパックが新登場! ●価格=オープンブライズ

従来のクリスピアと比較していちばん感じたのは、全体的に発色がよくなり、

小粋なパッケージ改良



(写真左) A4サイズの50枚入りパッケージは、ボックスタイプになっているのでプリントの保管に便利。(写真右) A3とA3ノビのパッケージにはプリントを持ち運びしやすいように取っ手が付いている。

被 写体やシーン、表現に応じてフィルムを使い分けるように、私はプリント用紙を使い分けている。用紙の選択肢が幅広いカラーインクジェットプリンターは便利で、同じ写真でも用紙によってプリントの印象が変わるのでおもしろい。フィルムで撮影した写真をスキャンしてプリントすることもある。

お気に入りには水彩画紙や版画紙といった画材紙がベースのファインアート紙。光沢のない仕上がりが味わい深く、テクスチャーのある紙の風合いが、近年よく足を運んでいるアイルランドやスコットランドの風景、そして私の作風にもうまくなじむからだ。ファインアート紙は種類も豊富で、どれにしようかいつも頭を悩ませるが、これがじつに楽しい。

使用する用紙によってRAW現像やフォトレタッチでの調整を微妙に変えている。私にとって「写真IIプリント」なので、撮影のときと同じくらい神経を使う重要な作業だ。とはいえ、用紙の選択を誤ってしまうと、どんなに調整してもイメージどおりのプリントには仕上がらない。用紙によって得手不得手、向き不向きがある。いくら好きだからといって

エプソン写真用紙 新クリスピア×PX-5600だから表現できた スコットランドの空気感

旅写真家として世界中を飛びまわる岡嶋和幸さんが近年足繁く通うフィールドのひとつがアイルランドやイギリスといった欧州の国々だ。その作品制作における重要なワークフローであるプリント作業の極意とはいかに。



Kazuyuki Okajima

PHOTO&TEXT=岡嶋和幸
状況写真=大浦タケシ

も、なんでもかんでもファインアート紙でプリントしたりしない。

色彩の鮮やかさ、階調表現の豊かさは、光沢系の用紙のほうが再現性に優れている。メリハリのあるプリントに仕上げたいときは断然有利だ。これまでは「クリスピア」のほか、サードパーティー製の複数の光沢紙をその候補に加えていた。ところが、今回「新クリスピア」を使ってみて、光沢紙はこれだけで十分にいけると感じた。

近年は主に顔料インクを採用したプリンターを使用している。MAXART K3 PX-5600も顔料系プリンターだが、光沢系の用紙を使用しても染料系プリンターのような艶やかな光沢感は得られない。しかし、従来のクリスピアよりも光沢感や表面平滑性は向上していて、その上品な仕上がりに好感を持っている。光沢感が強すぎると光の反射や映り込みなどで写真が見えづらくなるため、むしろこれくらいの方がちょうどよいように感じた。

【おかじま・かずゆき】
1967年1月1日、福岡県福岡市生まれ。東京写真専門学校(現・東京ビジュアルアーツ)卒業。スタジオアシスタント、写真家の森健児氏、沼田早苗氏の助手などを経てフリーランスとなる。旅写真家として世界各地を旅しながら撮影した作品をさまざまなメディアで発表。近年は主にアイルランドやスコットランドへ足を運んでいる。写真集「ディングル」写真展「ディングルの光と風」ほか多数。
http://kazuyuki-okajima.com/

リニューアルされた写真用紙クリスピア(高光沢)の進化ポイント

広い色再現範囲の実現

従来よりもほぼ全色域の色再現範囲が10%拡大しているため、そのぶん高彩度やシャドウ部分の表現力が豊かになっている。

進化を遂げた7層構造

インク受容層を発色層と吸収層の2つに分けたため、従来の6層から7層に用紙構造が変更になっている。これにより発色と色再現範囲が向上。特にイエローとブラックでその効果が見られる。さらに、スーパークリスタルコート層の改良によって、色安定性も飛躍的に向上。

用紙のパルプ材料や抄紙工程の最適化、上層のRC樹脂層の厚みを増やすことなどで表面の平滑度を向上させている。